



# トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37F

Phone:03-3344-1701(代)

Fax:03-3342-6911

No.83

Apr. 1998

## 中国西湖の環境浄化プロジェクト 研究成果報告会を開催

4月2日(金)3日(土)の両日にわたって滋賀県立琵琶湖博物館において「中国杭州西湖の水質浄化をめぐる日中共同研究 - 研究成果報告と今後のビジョン - 」と題する研究報告会が開催された。研究に携わった日中両国の研究者をはじめ、このプロジェクトを支援した日中双方の財団・基金会関係者、および日本の環境NGOや関連分野の研究者などが参加し、2日にわたり熱心な議論が展開された。

### これまでの経緯

人口約120万の杭州市の市街地に隣接する西湖は、古来中国の歴史的景勝として知られているが、富栄養化にともなうアオコの発生など水質の劣化が近年著しく進んでいる。地元杭州市水域管理処や杭州大学などを中心に、これまでも水質浄化の対策は講じられてきたが、必ずしも成果は十分ではなかった。

一方、中国では1986年に国家自然科学基金委員会が誕生し、以来、日本の財団界との交流が進められていた。この交流の中から、西湖の水質浄化を日中共同研究の課題とする要請が中国側より行われた。これを受けて、1992年10月に、日本の湖沼研究の第一人者である西條八束名古屋大学名誉教授が助成財団訪中団の顧問として現地を訪ね、日本の一線級の湖沼研究者と中国現地での豊富な蓄積を持つ研究者との日中共同プロジェクトが発足するにいたった。

94年には共同研究協定が締結され、95年、96年にわたり調査研究が続けられた。この間の研究資金は中国国家自然科学基金委員会、浙江省自然科学基金委員会、日本の岩谷直治記念財団、鹿島学術振興財団、住友財団、トヨタ財団、地球環境基金などから助成を得ている。

### 報告会の概況

報告会第1日目は、「研究成果報告と日本の事例」と題するので、開会にあたっては、日中湖沼環境研究会代表である沖野外輝夫・信州大学教授、同顧問の西條八束氏、中国国家自然科学基金委員会国際合作局副局長の常青氏、浙江省自然科学基金委員会副理事長の陳永光氏が挨拶に立ち、それぞれの立場から今回の共同研究の意義について確認した。

研究成果報告は杭州大学の裴洪平副教授と、沖野教授が行い、富栄養化対策のひとつとして、西湖近傍の銭塘江からの引水路の終端に沈殿池を設置することが提案された。

休憩をはさんで、市民による水質浄化実験の事例として千葉県行徳野鳥観察舎友の会による成果の報告が蓮尾純子氏より行われた。ここはトヨタ財団第4回研究コンクールで最優秀賞を受賞したチームである。野鳥観察舎前のドブ川にうなぎ養殖用の水車を据え、次に酸素を吹き込んだ水を造成した池に流し込み、底生生物から鳥にいたるまでの食物連鎖を活かして水の浄化と野鳥の誘致とを一挙に実現したものである。

次に紹介されたのはアメニティ・ミーティング・ルーム(AMR)という名のNGOの活動で、代表の酒井憲一氏と事務局長の高橋克彦氏が報告を行った。このグループは96、97年度、地球環境基



金の助成を得て西湖において地元中学生の参加による24時間連続水質観測のイベントを行い、成果を上げている。

第2日目は、「今後の展望」と題するものである。最初に東京農工大学の小倉紀雄教授と、杭州大学の裴副教授がそれぞれ西湖フィールド・ミュージアムの構想を提案した。それぞれの提案は設置候補地に違いはあるものの、生態系を利用した水の浄化と市民の啓発とを結び付けようという発想は共通している。前日に紹介された日本の2つの市民グループの活動も、この提案の実現可能性を考察するための手がかりを提供しているともいえる。

この提案を受けて、今回の会場となった琵琶湖博物館の川那部浩哉館長が、参加型野外博物館を目指した同館の経験を踏まえ問題提起を行った。構想段階から専門学芸員が参加し10年をかけて企画を練り、スターとしてからもなお次の段階を目指して不断の再構築を心がけるなど、琵琶湖博物館はまさに人が支えるということが強調された。

ついで参加者全員による活発な討論が行われ、現実的な課題とそれを乗り越えるためのアイデアや、フィールド・ミュージアムに託す夢など建設的な提案が相次いだ。

今回の会議の前には中国側とAMR、日本側研究者も参加して行徳のフィールドを半日かけて視察してきたこともあり、日中双方の議論はかなりよくかみ合っていたと思われる。醒めた目で見ればフィールド・ミュージアムは10年先の夢ともいえるが、日中双方が同じ夢を語る事ができたことは大きな前進であった。(久須美記)

## 『組織病理アトラス』 中国語版刊行

佐々木研究所研究員 安藤(路) 進

本書刊行を思い立った背景

病理学の教科書ともいえるべき“組織病理アトラス”の中国語版が1997年12月、中国上海で刊行されました(写真下)。

この本を中国で出版した背景には、私たち同世代の中国人医学者たちの体験が大きな要因となっております。1977年、休学状態が続いた中国全土の大学は文化大革命の終息とともに10年ぶりに全国大学統一入学試験が行われ、当時高校卒業後“下放”により農村で働きながら勉強をしていた青年たちが一斉にこの統一試験を受けました。私は中国医科大学に入学することができました。しかしながら、このような状況下での大学再開の道は険しく、教科書や教材も不足がちで、授業では先生方の手製のプリントに従い学ぶという状態でありました。病理学においてはカラーはもとより白黒の組織病理アトラスもなく、実習時には各人が顕微鏡を覗きながら色鉛筆で組織の絵を描き、それを本として勉強しておりました。大学卒業

後は外科医として病院に勤務し、1985年名古屋大学医学部病理学第二講座へ留学しました。(故)星野宗光指導教授から、これはとてもよい本だからと“組織病理アトラス”を紹介されて以来、現在まで使用してきましたが、このアトラスは非常に分かりやすく、私が大学で病理学を学んでいた当時、このようなアトラスがあったならどんなによかったことだろうと常々思っておりました。

大学院修了後、私は(財)佐々木研究所に勤務し、引き続き病理の研究に従事する一方で、杏林大学助手の諸傑君や日本医科大学助手の喬炎君をはじめとする中国からの病理学専攻の研究者や留学生たちと互いの交流のため1991年、在日中国人病理同学会を設立しました。会員それぞれの知識、技術をどのように、あるいはどういった形で日中両国の文化、科学、技術交流の為に貢献できるかについて考えた結果、この“組織病理アトラス”を中国病理学者、病理医および医学生に紹介す



るため、自分たちの手で翻訳出版しようではないかと六十数名の会員に呼びかけました。訳者それぞれが少しずつ出資し、無報酬、自由参加、また各翻訳者の出身校にこの本を紹介するという条件のもと、私と同様な体験をしてきた同世代の24名が翻訳を引き受けてくれました。1992年、私は在日中国人病理同学会の代表として、このアトラスの代表著者でいらっしゃる飯島先生に著作権についてお願いに伺いました。先生は日中両国の文化学术交流の重要性の見地のもと、私たちの考えに即座に御理解を示して下さいました。

#### 出版までの長い道程

その後私は北京のある医学関係の出版社へ足を運び、他の訳者も出版社探しに尽力してくれました。しかし近年来中国の市場経済のもと、多くの出版社は採算の合わない仕事を引き受けないところが増え、特にこの本はカラーであるために非常に費用がかかる反面、専門書であることから購買層が限られているということから価格面での交渉が折り合わず契約に至ることができませんでした。このような折、東京医科歯科大学の陳奇君が上海画報出版社の張錫昌先生を紹介してくれました。張錫昌先生は私たちの主旨に賛同して引き受けて下さいました。

日本各地の会員からの訳文は諸傑君が回収と審査を担当してくれました。原稿のチェックは東京在住の訳者が中心となり、時には休日を返上して訳文の討論会を行ったりもしました。校正は日本医科大学の温敏さんの恩師である白求恩医科大学の楊相琳教授にお願いすることになっておりましたが、体調を崩され入院されたため、急ぎょ私の母校である中国医科大学病理学教室赫明昌教授にお願い致しました。

校正も出版社の準備も整い、このカラーアトラスの翻訳出版の見込みが出て来ましたが、当時の私は出版に関する知識情報が皆無であったため、予想していた以上の費用がかかるという現実直面してしまいました。そんな折、文光堂の浅井社長、武田部長のご厚意により日本の出版界では初めてのカラーフィルムの無償提供や印税面での多大な優遇をしていただきました。また、トヨタ財団が出版費用の助成をして下さることが決定し、経済面での大きな壁をとり除いて下さいました。このような心強いご支援をいただき、私たちはさっそくこの本の出版の仕事の中心を中国へ移すべく、1995年5月、私と陳奇君は30kgのカラーフィルムを持って上海へ飛びました。

私たち訳者および校正の赫教授はこれまで出版の経験が全くなく、一方上海画報出版社は医学の専門書出版の経験が乏しかったため、出版に至るまでのプロセスにおいて相互に少なからず苦勞を致しました。特に校正、中国語索引製作などの点で私たち訳者、校正者が一字一字見直していかなければならず、また日本語から中国語への翻訳によって文字数が大幅に減少し、版面中に多くのスペースができてしまったり、さらには門外漢の私が総論部分の図と表および文章に関してデザインしたものを出版社が工夫して印刷をするというような形をとらざるをえませんでした。次に、訳者、校正、出版社がそれぞれ日本、沈陽、上海という三地域に分かれていたことも大きな障害の一つとなりました。通信だけでは解決できないこともありましたので、私は沈陽の赫教授のもとへ95年12月、96年9月の二回、休みを取って出かけました。赫教授および上海画報出版社の劉復昌先生三人で毎回数日深夜にわたり全書の討論、修正を

行いました。また中国の近代化に伴い経済発展は頻繁な人的流動化をもたらし、このアトラスの有能な担当者であった劉復昌先生も出版の最終段階を迎える頃、会社を変えられるなどのこともあり、上述のような諸々の理由により当初の予定より1年ほど遅れてしまいました。

#### 刊行とその後の反響

以上のような経緯を経て“組織病理アトラス中国語版”は1997年年末に出版されました。カラー写真の鮮明度は日本語版とほぼ変わらないほどの出来ばえとなりましたが、定価は予定よりも若干高くなってしまいました。世界市場における紙代の高騰などで、中国で出版される本は全般に2割ほど高くなり、この本も契約時の価格では採算が合わなくなってしまったことが主たる原因ですが、それでも一昨年および昨年中国国内で出版された同類カラーアトラスに比べ4割安く出版することができました。

中国では現在、毎年約3万人の学生が医科大学に入学し、病理学は必修課程でありますので、今後も大勢の学生に利用されることが予想されますが、一人でも多くの学生や先生に知ってもらうため、出版と同時に全国すべての医科大学および研究機関の図書館に1冊ずつ寄贈しました。また全国の大学の病理教室へこのアトラスを寄贈する予定にしております。中国医科大学、大連医科大学の教材発行課には学生に直接紹介してもらえるようにしました。さらに学生にもっと手に入れてもらいやすい価格にするため、簡易版の出版も計画しています。中国の大学は1月から冬休みに入り3月より後期が始まりますので、学生たちの反響はこれから出てくるものと思われま

また病理学者の手元にもおいてもらえ

るように、中国の病理学会各支部の会員に定価の7割で提供しています。現在東北遼南地方の病理学会会員にはすでにほぼ全員に購入していただきました。中国の大学の病理学者、病理医(大学病理学教室を除く)の多くは外国へ留学することが非常に少ないため、外国の病理学のレベルはほとんど知られておらず、“組織病理アトラス”中国語版の発行は初めての外国の病理分野の専門書であり、また比較的低価格(中国の同類書籍より約4割安い)で出来ましたので、喜んでいただけているようです。

このアトラスは将来的にも中国の病理医および医学生が病理学を学ぶのに非常に役立つと共に、この本を通じて日本の病理学に身近に接することができ、日本におけるのと同様に中国でも大変有用な専門書として、未永く手元において活用してもらえらることと信じております。

おわりに

最後になりましたが、世界に名だたるトヨタ財団の強力な経済的ご支援のもと、著者の諸先生、校正者、日中双方の出版社をはじめとする大勢の方々の本当に暖かいご理解、ご尽力をいただき、日中両国が育ててくれました私たち在中国人病理同学会会員の20年前の体験から生まれました小さな熱意が、ここで実を結ぶこととなりました。

中国における医学の病理という限られた分野ではありますが、この実が種となり、新たに日本と中国の大地で、長江の流れのように絶えることなく大きな実を結んでゆくことと思います。非力な私たちに、このような無限の意義深い仕事をさせていただきましたことに、訳者一同、トヨタ財団はじめ、日中の関係各位の皆様へ改めて心より厚く御礼申し上げます。

## 1998年度事業計画

常務理事・事務局長 黒川千万喜

3月19日に第83回理事会が開催され、1997年度市民活動助成などが決定されるとともに、98年度の事業計画が決定となった。

### 98年度事業の概要

本年度の助成金総額は昨年とまったく同じ4億5,900万円である。ただし、各プログラムごとには増減がある。「研究助成」は2億円で変わらず。「市民社会プログラム」では500万円増額し3,500万円。「東南アジアプログラム」では1,000万円減額し1億5,400万円。「計画助成」は5,000万円変わらず。「成果発表助成」は500万円増額の2,000万円である。

このうち特に「東南アジアプログラム」では各国の金融市場および経済の混乱を踏まえ、予算執行時の現地経済情勢も考慮した弾力的な対応を心がけることとした。

個々のプログラムの内容は概ね昨年に準ずるが、インドネシア若手研究助成では本年度は修士・博士課程への助成にのみ限定し重点課題への助成は行わないことにした。これはプログラムの見直しの意味も込めてのことである。また、各プログラムとも任期満了に伴う委員の交代があり、とりわけ「研究助成」では全委員長が新任ということになった。

### 事務局の重点実施事項

本年7月から10月にかけて東京、名古屋で開催する「甦った漆の棺 - 中国古代の漆文化」(仮称)と題する展覧会がひとつのおおきな柱である。これは中国湖北省から出土した曾侯乙墓の木製漆塗棺を

中心に戦国・秦漢時代の漆芸品百余点を展示するもので、湖北省博物館、東京国立博物館との共催事業である。

もともとこの漆棺は出土後、長年水をかけながら維持していたのを、トヨタ財団の計画助成を得た湖北省博物館が脱水・樹脂加工の処理に取り組み、恒久保存に成功したというもの。今回の日本での展示は、その成果をぜひ中国本土にさきがけ日本で見てもらいたいという同博物館の意向による。

展示は、7月21日から8月30日までが上野の東京国立博物館、9月23日から10月25日までが名古屋の国際デザインセンターをそれぞれ予定している。

本年度の事務局実施事項のもうひとつの柱はホーム・ページの開設である。

従来、業務データベースとして蓄積してきた4千件以上の助成対象カルテを中心に、1千数百点の助成成果物の書誌目録などを日・英両語で検索閲覧できるようなシステムを目指して作業を進めている。コンテンツはほとんどが財団自身で制作し、WEBサーバーの管理は外部に委託する。10月中旬にはオープン予定である。

この他にも、国際助成の各国語による成果物の整理・目録化や、アジア各国財団との連絡会の実施などを事務局では本年度の重点として進めていきたいと考えている。

なお、本年4月から新たに4人のスタッフを採用した。紹介は8頁にゆずるが、とかく財団では財政上の制約から事務局の人的流動性が低くなりがちだが、長期にわたって財団の活性を保つためには若い人材の補充は不可欠である。あいかわらず財政状況は厳しさが続く中で、本年度新たに若い力を事務局に迎えることができたことはうれしいことである。

## 1997 年度市民活動助成対象が決定

プログラム・オフィサー 渡辺 元

本年度の市民活動助成については、合計 183 件の応募(概要等詳細については、財団レポート No.82 号を参照)があった。これらにつき、昨年末から本年 1 月下旬にかけて委員各自による個別の評価作業が実施され、2 月の初旬には、その結果を踏まえた選考委員会が行われた。

委員会では、評価結果が分散する中、出来るだけ多くの取り組みに応えようと、実に丁寧かつ密度の高い審議が長時間にわたって展開された。

今回の委員会では、差し迫ったシビアな問題に取り組んでいこうとする計画のみならず、多少長期的に夢の伴う内容に

も配慮し、先の新しい傾向に即した活動も積極的に応援しようと試みた点に特徴がある。

そして下記の通り、13 件・2,000 万円を本年度の助成対象として採り上げた。

これらの多くは、地域や生活面において、ややもすると見過ごされがちなベシクな部分に焦点を当てた重要な試みである。普遍性と波及性を感じさせるものばかりであり、今後の成果を大いに期待したい。

### 助成対象一覧

助成番号	題 目	代表者	所 属	助成金額 (円)
1	97-K-061 (大阪)	森脇 君雄	財団法人 公害地域再生センター 理事長 62 歳 ほか 8 名	1,000,000
2	97-K-085 (滋賀)	池内順一郎	蒲生野考現倶楽部 会長 66 歳 ほか 14 名	1,500,000
3	97-K-097 (東京)	山内 美代	杉並区知的障害者育成会 会長 68 歳 ほか 14 名	1,000,000
4	97-K-004 (茨城)	飯島 博	ヒシクイ保護基金 代表 41 歳 ほか 8 名	1,500,000
5	97-K-014 (神奈川)	橋本 静代	発見工房クリエイト 所長 68 歳 ほか 6 名	1,900,000
6	97-K-019 (神奈川)	三木恵美子	女性の家“サーラー” 代表 40 歳 ほか 11 名	1,000,000
7	97-K-031 (神奈川)	佐野 政史	川崎市精神障害者連絡会 代表世話人 46 歳 ほか 11 名	1,800,000
8	97-K-049 (東京)	大平 睦郎	「ファミリーハウス」運営委員会 代表理事 52 歳 ほか 30 名	1,300,000
9	97-K-075 (大阪)	宇野 澄江	ウィメンズセンター大阪 共同ディレクター 41 歳 ほか 15 名	1,300,000
10	97-K-082 (東京)	嶋本 昭三	日本障害者芸術文化協会 会長 70 歳 ほか 7 名	1,600,000
11	97-K-114 (山梨)	山崎 俊二	山梨外国人入権ネットワーク・オアシス 副代表 46 歳 ほか 12 名	2,000,000
12	97-K-123 (大阪)	池住 義憲	地球市民教育センター 所長 53 歳 ほか 18 名	1,300,000
13	97-K-182 (京都)	佐野 充照	西陣活性化実顕地を作る会 代表 42 歳 ほか 11 名	1,800,000
小 計				20,000,000

## 研究助成研究報告書提出リスト

リスト内容	〒112-8460 文京区大塚3-29-1 文部省学術情報センター 管理部共同利用課 共同利用第一係 電話 03-3942-6933 FAX 03-3942-6797	(文化)について試行してみました。 報告書コピーを委員に配布しコメントをいただき、あわせて助成対象者からもアンケートによりその後の展開状況などをうかがい、これらを総合して何人かの委員の方と討論を行いました。 概ね期待した成果が上がっているという評価でしたが、レビューというだけではなく、助成後の対象者との持続的なコミュニケーションが大切だということが改めて確認されました。
3月10日現在、以下の研究成果の報告書が財団に提出されています。財団にて閲覧できますが、原則としてコピーはできません。閲覧ご希望の方は研究助成担当までお問い合わせ下さい。	助成の評価についての試行 94年度以来「多元価値社会の創造」を基本テーマとして助成を行っていますが、これまでの助成の結果について報告書をレビューしたいという意見が選考委員の間でもあったため、B(共同研究)の課題1	
なお、これらの要約につきましては、文部省学術情報センターの「民間助成研究成果概要データベース」で検索、閲覧が可能です。ご利用の詳細については、右記までお問い合わせ下さい。		

### 1994年度研究助成B(共同研究)

#### 課題1: 多様な文化の相互理解と共存

94-B1-052 社会が多民族化していく中での社会精神医学的ストレスの解明と、よりストレスの少ない多民族共住社会を可能にするための精神医学的ケアのモデルづくりへの提言(移民、難民を多く受け入れている国の事例をもとに)..... 桑山 紀彦

#### 課題2: 新しい社会システムの提案 - 市民社会の構築をめざして -

94-B2-004 21世紀へ向う華南経済圏と日本 - 社会主義と資本主義が共存する多元価値的地域社会とその対日関係 - ..... 金 泓 汎

94-B2-082 多文化社会における共存のための方策に関する研究 - オーストラリアと日本の事例から - ..... T. モーリス・スズキ

#### 課題3: これからの地球環境と人間生存の可能性

94-B3-124 アフリカゾウと地域住民との「新たな」共存を図る広義の緩衝地帯に関する具体的・試行的研究..... 小原 秀雄

94-B3-130 ロシアの炭化水素地層における微生物生態の研究..... 石本 真

### 1995年度研究助成A(個人研究)

95-A-121 パプアニューギニア・フォイ族の石油開発と文化変容..... 樋谷 智子

95-A-141 サーフィン文化からチャンパ国への移行期にみられる土器群の多様性と地域間交渉に関する研究 - ヴェトナム・クアンナムダナン省チャキウ遺跡周辺の考古学的調査を中心に - ..... 山形真理子

95-A-256 超電導超大型粒子加速器(SSC)計画をめぐる産・官・学諸セクターの行動過程..... 綾部 広則

### 1995年度研究助成B(共同研究)

#### 課題1: 多様な文化の相互理解と共存

95-B1-051 盲僧集団に関する国際共同研究 - 日韓比較を通して儀礼・伝承文化の共通性と差異を探る..... 永井 彰子

95-B1-083 遺跡・住民・森林の共存共生構築プロジェクト - アンコール遺跡をめぐるカンボジアの村落と森林の事例調査・研究..... 塚脇 真二

95-B1-096 アジア・太平洋地域の倫理意識に関する国際比較研究 - エイズ流行規模と地域住民のHIV感染者に対する意識変化 - ..... 大井 玄

95-B1-122 中国「徽州民居」における集住空間と町並み景観の変化および保存再生手法に関する日中共同研究..... 大西國太郎

#### 課題2: 新しい社会システムの提案 - 市民社会の構築をめざして -

95-B2-002 インド、バングラデシュおよびスリランカにおける非政府・非営利組織の社会・経済的役割に関する比較研究..... L. S. デ シルバ

95-B2-036 自立した市民を基礎とする市場経済社会の構築に対する独占禁止法の果たす役割..... 村上 政博

95-B2-037 ローカル・イニシアティブによる新しい社会システムの創造 - グローバル化するローカルの可能性を求めて - ..... 藪野 祐三

95-B2-045 アフリカにおける民族ゲリラの武装解除、権力の共有および民主主義への移行についての研究..... J. B. アデカンニエ

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.83

課題3：これからの地球環境と人間生存の可能性

95-B3-042	MOX 燃料（ウラン・プルトニウム混合酸化物燃料）の軽水炉利用の社会的影響に関する包括的評価	高木仁三郎
95-B3-097	環太平洋地域における環境保全型・低投入持続性イネ多収栽培の確立のための根系の戦略的管理に関する国際共同研究	森田 茂紀
95-B3-115	ベトナム農村の生活・労働条件改善に関する実践的研究 - 住民参加型アプローチの支援 -	川上 剛
95-B3-122	農産物の多重的「地産地消」システムによる持続的なアジア農業・農村の構築に関する実証的研究 - 佐賀における取り組みのアジア的適用 -	長野 暹
95-B3-160	タイにおける総合的害虫防除の農業生態学的研究 - 農業従事者と研究者による職際・学際協働 -	M. イシイ
95-B3-165	東アジア地域での環境保全の枠組み構築のために - 日本から中国への脱硫技術の技術移転の費用便益分析および中国における社会システムと環境破壊の影響関係の分析 -	明日香寿川

課題4：市民社会の時代の科学・技術

95-B3-159	東北ブラジル、フォルタレザにおける不法・不備な人工流産の解決策としての適切な技術導入に関する学際的評価研究	W. V. C. フォンセカ
-----------	---	----------------

1996 年度研究助成 A (個人研究)

96-A-068	日本語、英語を中心とする個別言語の普遍性と多様性 - 統語構造の生成過程における変革 -	北原 久嗣
96-A-135	箏の形態と音楽を変化させた文化背景についての歴史的研究 - 日本の音楽理論成立過程の考察と箏の形態および音楽の変化を軸にした多重文化コードの解明 -	平澤 典子
96-A-214	メラネシアの近代史と異文化像の形成 - 19世紀以降の民族誌写真の分析から -	林 勲男
96-A-379	アジアにおける日本の文化産業：その影響力・存在感と日本と「アジア」のポストコロナルな関係の考察 - 台湾とシンガポールを中心に -	岩淵 功一
96-A-017	トランスナショナル・エスニックネットワークの形成 - 日本・ペルー・米国間を「越境」する日系ペルー人の研究 -	竹中 歩
96-A-026	文化価値体系としての宗教をとらえてみた地域アイデンティティの形成に関する研究 - 東京・西日暮里三丁目を事例として -	F. デュティユ
96-A-040	人民公社解体後の個人農による農村協同社会の創造 - 中国東北における北海道の協同組合システムの導入に関する研究 -	朴 紅
96-A-106	近代中国における国家 - 社会関係の変化 - 日本型地方自治の導入を中心に(1901-1937) -	黄 東 蘭
96-A-232	農耕開始期における地球環境変動の復元 - 気候変動期における人間社会変化を探る -	北川 浩之
96-A-162	政策決定過程における科学的根拠の不確実性に関する科学社会学的研究 - 食品中残留農薬の国際基準および日米の国内基準を中心に -	家田 貴子
96-A-279	日米の軍事技術研究開発共同化とその地域安全保障に与える影響の分析 - アジア太平洋地域の新しい多角的な安全保障と信頼醸成を求めて -	池上 雅子

1996 年度研究助成 B (共同研究)

課題1：多様な文化の相互理解と共存

96-B1-005	現代中国における近代化と朝鮮族の文化的自律の可能性に関する社会人類学的研究	佐々木 衛
96-B1-026	朝鮮近代知識人の民族的自我の形成に関する研究 - 近代日本との出会いを通じた民族的自覚の過程を中心として -	池 明 観
96-B1-091	「木の文化都市」京都の伝統的都市住居の作法と様式に関する研究 - 京町家の「住人と職人の心と技」から次代の叢智を探る -	東樋口 護
96-B1-123	日本の台湾植民地統治の影響に関する歴史学的研究	檜山 幸夫

課題2：新しい社会システムの提案 - 市民社会の構築をめざして -

96-B2-057	インド、バングラデシュおよびスリランカにおける非政府・非営利組織の社会・経済的役割に関する比較研究	L. S. デ シルバ
96-B2-076	阪神大震災を教訓とした地域社会の再構築に関する総合研究 - 災害ボランティア活動の総括的把握と復興過程における地域社会の変容プロセス -	渥美 公秀
96-B2-085	ODAの大規模開発がもたらす住民強制移住問題に関する調査研究 - 「住民本位の開発」を求めて -	村井 吉敬

課題3：これからの地球環境と人間生存の可能性

96-B3-034	ロシア、ベラルーシ、ウクライナにおけるチェルノブイリ原発事故影響研究と被災者救援活動の現状に関する調査研究	今中 哲二
96-B3-087	公害地域における市民参加型の自然環境復元手法に関する調査研究 - コミュニティ活動を通じた地域の環境資源・人的資源の有機的活用をめざして -	宗田 好史

新刊紹介

「大事故の予兆をさぐる

- 事故へ至る道筋を断つために -

宮城 雅子著  
講談社刊 ブルーバックス  
98年3.20 304頁  
ISBN4-06-257209-5(科)

ハインリッヒの300-29-1法則と呼ばれる安全に関する確率分布則がある。すなわち、1件の大事故が発生する前には、29件の小事故と、事故には至らない300件の不具合が生じているというものである。概して1件の大事故は信じられないような不具合の連鎖から成り立っており、事故後の後ろ向き調査ではその真相を解明することは極めて困難である。そこで、1件の事故のすそ野を形成する300の不具合(インシデント)を把握し、前向きの予防策を講じようとするのが本書の提起する Incident Reports Analysing System (IRAS)である。

本書成立の背景には、航空機のパイロット、管制官、整備士の3職種から合計千数百も収集したインシデント・レポートと、その内容を百項目以上もの要因を抽出し数量化 類の手法を駆使して要因間の相互関係を分析した、膨大な研究業績がある。これらは1986年以降95年までの間に航空業務3部作という形で有斐閣から刊行されている。財団は基となる研究から出版まで一貫してこの研究に助成を行った。

今回の著作は、前の業績を踏まえての著者の完全な書き下ろしである。航空事故に限らず、原発事故や化学プラント事故の事例なども含め、高度技術体系の最大の弱点ともいえるヒューマン・エラーの様相を克明に描いている。

著者はIRASを行える第三者機関の設立の必要を訴えているが、確かに国や企業などの当事者には本音のインシデントが報告されるとは思えない。人間は必ずミスを犯すものであるという前提に立ったIRASこそ、ハインリッヒの経験則を書き換える最良の方策であろう。(M.K.)

研究助成 1998 年度公募開始

締め切りは5月29日

1998年度研究助成の公募がこの4月1日から始まっています。今期から選考委員長が下記の方々になりました。

研究助成A(個人研究) = 船曳建夫(東京大学教授) / 研究助成B(共同研究) 課題1 = 濱下武志(東京大学教授) 同課題2 = 西川潤(早稲田大学教授) 同課題3,4 = 吉川弘之(放送大学学長)。

各課題の詳細は応募要項をご参照下さい。要項・申請書をご希望の方は、和文・英文の別を明記の上、1部200円、2-3部390円の切手を同封し財団事務局までお申し込み下さい。

公募の締め切りは5月29日(金)ですが、要項・申請書のご請求は5月15日までにお願いいたします。

財団法人

4月1日付けで次の4名があらたに財団に加わるようになりました。

金子 弥生(かねこ やよい)

現在、博士論文執筆中。研究テーマは「あなぐま」。研究を続けながら、トヨタ財団研究員として研究助成業務などを手伝う。

川崎恵津子(かわさき えつこ)

在学時代にはインドネシア留学経験もあり、アシスタント・プログラム・オフィサーとして東南アジア関連プログラムを中心に従事する。

喜田 亮子(きだ りょうこ)

プログラム・アシスタントとして、研究助成業務などに従事するが、当面は、「甦った漆の棺 - 中国古代の漆文化」展の開催も手伝う。

田島 文(たじま あや)

総務部に所属し、経理を中心に人事や秘書など財団の総務業務に従事する。

編集後記

路進さん - 現在は帰化されて安藤さん - には「組織病理アトラス」刊行までの道のりをご紹介いただき、ありがとうございました。中国での組み版やカラー印刷が日本語版と全く同じ水準であることを改めて認識しました。

本レポートも今号から Windows DTP のフィルムセンターに原稿を持ち込んでの出力に挑戦しています。少しでも仕上がりの精度が上がっていれば幸いです...



トヨタ財団レポート No.83

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団までお申し込み下さい。

発行日 1998年4月10日  
発行所 財団法人 トヨタ財団  
発行人 黒川千万喜  
編集人 久須美雅昭  
印刷 真友工藝